

歴史探訪 Part II - ②④

江戸川木材工業株式会社

顧問 清水 太郎

去る11. 3 東海道ネットワークの会の例会がありました。テーマは(駿遠3城巡り 今川、武田、徳川の戦国つばぜり合いをたどる)です。東海道ネットワークの会は、約30年前に発足し当初は500人以上いた会員は30人に減り、うち11人のメンバーが掛川駅に集合しました。前会長は高齢のため欠席。秋庭4代目会長は健康が回復して復帰し、全員元気に出発しました。

今日巡る3城には、今川、武田、徳川の3武将が戦国時代に戦った跡が生々しく残っております。高天神城は、室町時代後期に今川氏によって築されましたが、戦国時代 城主小笠原長忠は、主君今川義元が桶狭間の戦いで敗死すると徳川に寝返り、城は家康の支配下に下りました。元亀2年(1571)、遠州に攻め入った武田信玄は2万5千の騎馬で城を包囲しましたが、攻略に失敗、あの信玄でさえ落とすことの出来なかった難攻不落の城として全国に名を広めました。その後、信玄は上洛途上、天正元年(1573)なくなりました。その前年の元亀2年(1572)、信玄は徳川・織田連合軍を三方が原で打ち破りその勢いで京へ向かいましたが、信玄の死が歴史を変える分岐点となりました。信玄の悲願は勝頼によって受け継がれ、北に諏訪原城を築いた勝頼は天正2年、再度2万の兵で包囲し、開城に至り、武田軍の最大の拠点となりました。

上杉謙信と川中島で5度戦って決着がつかなかったほどの信玄、最後は名軍師山本勘助を戦死によって失い、頼三陽の漢詩「鞭声粛々・・・」と詠われたほどの名勝負を展開した信玄が高天神城にこだわったのは、領地が海に接していなかったため、塩を得る手段を確保したかったことであろう。秋庭会長から高天神城の攻防は作家の心を揺さぶるほどの戦いであったと説明されました。そこで新田次郎氏の著書を購入しました。著者は元気象庁の役人で富士山頂の測候所で勤務していました。長男はお茶大教授の藤原正彦氏でありました。藤原氏の著書『日本の品格』はベストセラーになりました。著書の中で父新田次郎氏の役人時代の記述がありました。新田氏の同僚の中に私が高校時代の先生中野猿人氏がおられ、大変懐かしい想いをいたしました。私が大学卒業論文を作成していて、雨量計に日々の雨量を自動的に発信できる装置があればと思ったことがありましたが、新田氏が役人時代すでに発明していたことを知りました。ところが当時の新田氏は研究の傍ら、小説の執筆に熱中していたため、不真面目な研究者として発明は取り上げられなかったそうです。話が横道に逸れましたが、新田氏の著書で高天神城の激しい攻防の中で敵味方の憎悪を超越した感動的な交流があったという記述がありました。攻め手の徳川方の兵士の中に舞踊の名手がいて、今生の思い出にひとさし舞を見せてもらえないかとの要請が武田方からあり、総攻撃の前日に見事に披露したそうです。

信玄と謙信は激しく戦いをしつつも、敵に塩を贈ると故事にある程の交流がありました。武田氏が滅亡した後も家康は軍門に下ったかなりの人数を家臣として雇用しました。高天神城の城郭は急峻な地形に富んでいて、我々高齢者は助け合わないと、散策もままならない状態でありましたが、まわりは風光明媚、茶畑に囲まれて好対照を成しております。

昼食は最近リニューアルされた ふじのくにミュージアムで頂き、生憎当館の目玉富士山の雄姿眺望はかないませんでしたが、激戦の城址を訪ねる合間のひとときは一服の清涼剤となりました。

次の諏訪原城は、武田勝頼が天正元年(1573)に遠州攻略の拠点として築いた平山城です。約束の時刻に待機して下さった案内人は先ず、周辺の位置を確認するために、主要城砦分布図を配布してくれましたが、後日よく見ますと、周辺には20の城があり、うち13が徳川、武田に関連が深い城で、如何に両雄が覇権を巡って激しい攻防が展開されたかを窺い知ることが出来ます。曲輪・郭(くるわ)とは土塁や柵などでかこまれた平坦な区域のことで、屋根や斜面などを造成して作ることもあります。現在の駐車場の位置から入って、大手曲輪、二の曲輪(大手馬出)等12ヶ所の曲輪があります。城の名称にも武田氏ゆかりの諏訪を名乗っており、場内に諏訪神社を勧請しました。天正3年(1575)の長篠の戦いに敗れた武田勢は兵力が弱体化し、同年7月徳川軍の攻勢を受けて落城しました。攻略後、家康は武田軍に対抗し、東海道を抑える目的で牧の原城と改称し城を拡張しましたが、武田氏が滅亡し城の存在意義も薄れたため、廃城となりました。

掛川城について。城主が敗れて廃城となった跡を見てすさんだ気持ちになった後で見る、現存し立派に復元され、賑わっている城の姿を見ると安心してほっとする気持ちになります。掛川城は文明年間(1469～1486)駿河国主・今川義忠が遠江支配の拠点として築かせました。以後、家康家臣の石川家成、山内一豊、江戸時代は譜代大名11家26代の大名が城主となり、明治維新まで続きました。今でも新幹線の車窓から掛川城を見ますと、平和な時代に生きる喜びを感じさせてくれます。

来年は武田氏が隆盛であった時代の活躍の場、甲斐地方を温泉につかりながらゆっくり巡る企画も組まれており、楽しみです。



掛川城